『万葉集』の挽歌における死にかかわる表現についての考察

A Study of Expression about Death in Elegies in the Manyoshu

キーワード：万葉集、挽歌、死にかかわる表現

加藤　明

1　はじめに

上代文学における死にかかわる表現について調べを進めるなかで、『古事記』や『日本書紀』に頻出する「神あがる」「神さる」という表現が、『万葉集』にはほとんど見られないことに気づいたことから、『万葉集』における死にかかわる表現について改めてまとめてみようと考えた。『万葉集』における死にかかわる表現は、挽歌を中心に表されている。挽歌の中に見られる考え方やものごとのとらえ方、表現の仕方等について概括した先行研究はあるが、挽歌のすべてにわたりその表現の態様に即した総括及び分析を加えたものは管見に入らない(注1)。それを試みようというのが、本稿の目的である。はじめに死後の世界がどのように捉えられ表現されていたかについてまとめ、次に死にかかわる表現についてまとめる。なお、歌の引用中に柿本人麻呂の作品に印を付しているのは、本稿が今後の研究の前段的まとめとなっているためである。

『万葉集』に収載された挽歌は、下の表にまとめたとおりである。

なお、このほかに、亡くなった草壁皇子を回想した柿本人麻呂の挽歌的な歌詠が、巻第一の47番と49番に、山上憶良の愛児の死を悼んだと思われる歌が、巻第五の904番～906番に、大伴家持の長逝した弟を哀傷した歌が、巻第十七の3957番～3959番にある。

『万葉集』に収載された挽歌

巻数	歌番号	歌数	長歌	短歌
巻第二	141 ～ 234 番	94 首	16 首	78 首
巻第三	415 ～ 483	69 首	9 首	60 首
巻第七	1404 ～ 1417 番	14 首		14 首
巻第九	1795 ～ 1811 番	17 首	5 首	12 首
巻第十三	3324 ～ 3347 番	24 首	13 首	11 首
巻第十四	3577 番	1 首		1 首
巻第十五	3688 ～ 3696 番	9 首	3 首	6 首
巻第十九	4214 ～ 4216 番	3 首	1 首	2 首
合　　計		231 首	47 首	184 首

2　天上他界観に関連するもの

貴人の魂は、死後天上に上るという考え方が上代文学に見られるが、そうした観想に基づいて詠まれた一連の歌が、『万葉集』の挽歌の中で精彩を放っている。

(1) 魂が天上に上るという考え方から詠まれているもの

上述したように、人の死後、その魂が天上に上るという考え方に基づいて詠まれたと考えられるものは、次の11例である。(カッコ内は歌に詠まれている死者の名。＊は柿本人麻呂作。引用する『万葉集』の訓読は、中西進校注(講談社　1978年　西本願寺本)による。以下同じ。)

①＊167：……　高照らす　日の皇子は　……天の原　石門を開き　神上がり　上がり座しぬ(以下略)(草壁皇子)

②202：泣沢の神社に神酒すゑ禱祈れどもわご大君は高日知らしぬ(高市皇子尊)

③204：……高光る日の皇子　ひさかたの　天つ宮に　神ながら　神と座せば　(以下略)(弓削皇子)

④205：大君は神にしませば天雲の五百重が下に隠り給ひぬ(同前)

⑤416：ももづたふ磐余の池に鳴く鴨の今日のみ見てや雲隠りなむ(大津皇子)

⑥441：大君の命恐み大殯の時にはあらねど雲隠ります(長屋王)

⑦461：留め得ぬ命にしあれば敷栲の家ゆは出でて雲隠りにき(新羅から帰化した尼理願)

⑧475：……　白栲に　舎人装ひて　我豆香山　御輿立たして　ひさかたの　天知らしぬれ　(以下略)(安積皇子)

⑨476：わご王天知らさむと思はねば凡にそ見ける和豆香そま山(同前)

⑩906：布施置きてわれは乞ひ問う禱む欺かず直に率去きて天路知らしめ(男子名古日)

⑪3325：つのさはふ石村の山に白栲に懸れる雲は大君にかも

これらを見て明らかなように、詠まれた対象は、⑦と⑩を除き神や高貴な身分の人に限られている。⑦については、天平7年(735)の作であり、尼僧であることを考えると、「敷栲の家ゆは出でて雲隠りにき」という表現は、火葬による煙の上昇からの見立てという見方もできよう。この歌には詞書があり、「既に泉界に趣く」という記述が見られる。「泉界」は単純に黄泉の国ではないかもしれないが、尼理願の魂が死後天上に上ったと考えられてはいなかったのではないかと思われるので、この例の「雲隠る」は天上他界観の反映とは見ない方が適切であろう。⑩は、山上憶良の歌と思われるが、亡き愛児の魂が天に昇ることを願った切ない心情を謳ったものである。

(2) 魂が天上を往来するという考え方から詠まれているもの

⑫147：天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり(天智天皇の聖躰不豫御病急時)

⑬148：青旗の木幡の上にかよふとは目には見れども直に逢はぬかも(同前)

この二つの歌は、いずれも天智天皇の崩御前に倭大后によって詠まれたと伝えられている歌であるが、天皇の危篤という特殊な状況下での歌詠であり、やや特異な観想の表現と言えるであろう。

(3) 雲や霧を亡き人の魂の移動したものと見る考え方から詠まれているもの

⑭225：直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ(柿本人麿)

⑮＊428：隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかあらむ(土形娘子)

⑯＊429：山の際ゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく(出雲娘子)

⑰444：昨日こそ君は在りしか思はぬに浜松の上に雲とたなびく(丈部龍麿)

⑱1406：秋津野に朝ゐる雲の失せゆけば昨日も今日も亡き人思ほゆ

⑲1407：隠口の泊瀬の山に霞立ち棚引く雲は妹にかもあらむ

⑳3515：吾が面の忘れむ時は国はふり嶺に立つ雲を見つつ思はせ

⑭の歌は、柿本人麻呂が死んだ時に妻の依網娘子が詠んだもので、この歌の直前の224番には同じ作者による「今日今日とわが待つ君は石川の貝（一は云はく、谷に）に交りてありといはずや」という歌があって、石川が人麻呂の死に場所の伝承地の一つに数えられているわけであるが、石川に立つ雲に亡き夫の面影を見て偲ぼうというものである。⑳の歌は、巻第十四の相聞往来の歌で、挽歌ではないが、自分の面影を山頂に立つ雲を見てしのべというもので、亡魂に対してではないものの同じ発想で詠まれたものなので参考として示す。この考え方は火葬の普及により、広まったことが考えられる。火葬に際して立ち上る煙は上空の雲と一体化して見られやすい。⑮の歌は、「土形娘子を泊瀬山に火葬りし時に、柿本人麿の作れる歌」という題詞をもつ歌である。

このように、亡くなった人を立つ雲に見立てて偲ぶということは、広く行われたようである。また、この歌に続く⑯の歌も、同様に「出雲娘子を吉野に火葬りし時に、柿本人麿の作れる歌」という題詞をもつ歌であるが、そこでは、吉野の山にたなびく霧に見立てている。更に⑱⑲のような歌もある。

これらの歌と天上他界観とのかかわりは、明確に言明し難い。ただそこには、亡き人の魂が空に昇っていくという観想が見られるので、いま天上他界観の一群として示しておく。これらの作品の中で、特に火葬の実修と絡んで歌われたものは、天上他界観に基づく考え方というよりは、亡き人の魂の行方として、現れては消えてゆく雲や霧にその面影を偲ぼうとするものであり、挽歌的心情を託しやすい自然現象に基づいているのではないかと思われる。

3　山上他界観に関連するもの

天上他界観とは別に、死後の世界を山に求める考え方がある。その具体的な現れとして、死者を山に葬ったり死後の魂の行方を山としたりする考え方に基づいて詠まれた次のような作品がある。

㉑＊208：秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも（柿本人麿の妻）

㉒＊210,（＊213）：……かぎろひの　燃ゆる荒野に白栲の　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入日なす　隠りにしかば……大鳥の　羽易の山に　わが恋ふる　妹は座すと　（以下略）（同前）（213）は「或る本の歌」以下同じ。

㉓＊212,（＊215）：衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

㉔417：王の親魂逢へか豊国の鏡山を宮と定むる（河内王）

㉕420：……わご大王は　隠国の　泊瀬の山に神さびに　斎きいますと……高山の　巌の上に座せつるかも（石田王）

㉖421：逆言の狂言とかも高山の巌の上に君が臥せる（石田王）

㉗466：……露霜の　消ぬるがごとく　あしひきの山道を指して　入日なす　隠りにしかば　（以下略）（家持の亡りし妾）

㉘471：家離りいます吾妹を停めかね山隠しつれ情神もなし（同前）

㉙474：昔こそ外にも見しか吾妹子が奥つ城と思へば愛しき佐保山（同前）

⑧475：……白栲に　舎人装ひて　我豆香山御輿立たして　ひさかたの　天知らしぬれ（以下略）（安積皇子）

㉚476：わご王天知らさむと思はねば凡にぞ見ける和豆香そま山（安積皇子）

㉛1408：狂言か逆言か隠口の泊瀬の山に廬せりといふ

㉜1409：秋山の黄葉あはれびうらぶれて入りにし妹は待てど来まさず

㉝1806：あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば情苦しも

㉞3303：里人の　われに告ぐらく　愛し夫は……神名火の　この山辺から　ぬばたまの　黒馬に乗りて　川の瀬を　七瀬渡りて　うらぶれて夫は逢ひきと　人そ告げつる

以上十五首であるが、㉞以外はすべて挽歌として

詠まれたものである。㉞の歌は、巻第十三の相聞の部に分類してあり、その分類に従うならば、神名火山の奥深く入っていって逢えない夫を慕う相聞歌になる。しかしこの歌の歌いぶりは、夫の死の道行を嘆いた妻の歌と見るのがより適切なのではないかと考える。

この十五首について見ると、秋の山に散り敷く黄葉と死のイメージの相似から詠まれた㉑や㉜の歌もあるが、この二首を除く㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙⑧㉜㉞の十三首は、実際の山中への葬送の実修を背景としていると思われる。中でも、㉕と㉖の歌は、山中の巌の上に亡き石田王の魂があるというもので、泊瀬山の磐座を王の魂の鎮まる場所と見ている。これは、巨石に神霊が宿ると見る原始信仰を連想させるもので、神体山信仰にも繋がる考え方と見てよいであろう。山中や山中の巨石に死者の御霊（みたま）が鎮まっているという考え方は、実際の葬制としての山中への土葬とかかわりが深いと思われるが、それに加えて、仏教の普及により火葬の実修が増加するに伴い、山中や山際に火葬する場が設置されるなかで、そうした地に死者の魂も鎮まっているという考え方の醸成を助長していったであろう。奈良時代に続く平安京におけるいわゆる五三昧などがそうした地に作られていったことは、こうした考え方を引き継いでいるものと思われる。

なお、我が国における葬制の変遷について考えるなら、遡れば山中等に死体を遺棄する風があったことは間違いなく(注2)、人の遺体を何らかの方法で葬ることになってからも、そうした遺風の記憶として、山に他界を連想しやすかった事情はあると考えられる。

4　火葬にかかわるもの

次に火葬について、『万葉集』の例を検討してみる。火葬の実修が歌われたものは、『万葉集』には⑯⑱の歌を含めて次に示す7例である。

㉟＊213：……大鳥の　羽易（はがひ）の山に　汝（な）が恋ふる妹は座（いま）すと　人のいへば　石根（いはね）さくみて　なずみ来し　好けくもぞ無き　うつそみと　思ひし妹が　灰にていませば

㊱481：……朝霧の　おぼになりつつ　山城の相楽山（さがらかやま）の　山の際（ま）に　往き過ぎぬれば……我妹子が　入りにし山を　よすかとそ思ふ

㊲482：うつせみの世の事にあれば外（よそ）に見し山をや今はよすかと思はむ

㊳1415：玉梓の妹は珠かもあしひきの清き山辺に蒔（ま）けば散りぬる

㊴1416：玉梓の妹は花かもあしひきのこの山かげに蒔けば失せぬる

㉟は柿本人麻呂の妻が亡くなった時に作ったいわゆる泣血哀慟歌の二つ目の歌（㉒で示した歌）の「或本歌」である。㊱については、「山の際（ま）に　往き過ぎぬれば」の部分をどう解釈するかによって、山中への埋葬か山際での火葬かと、見方の分かれるところである。㊲は㊱の反歌であるが、この詠みぶりは、火葬の後の山に対するというよりは、山中への葬送によって生じた感懐と見る方がふさわしいように思われるが、火葬という見方もあるので、一応例の一つに加えておく。(注3) ㊳と㊴は、蒔いて散り失せたものは妹の灰であり、火葬後の散灰という葬法の面でも注目される。この二つの歌は、巻第七の挽歌に収められている。

火葬は、本来我が国で行われていた葬法ではなく、仏教の伝来により僧侶の葬法として広まっていったものである。その始原については、通常『続日本紀』の「道昭和尚物化（だうせうわじやうみまか）りぬ。（中略）弟子ら、遺（のこ）せる教（をしへ）を奉（う）けて、粟原（あはばら）に火葬（くわさう）せり。天下（あめのした）の火葬此（これ）より始まれり。」（文武天皇四年三月己未の条）(注4)という記述に従い、それが普及するのは、同年（700）以降と考えるのが一般的である。⑯⑱㉟の一連の人麻呂による歌詠が、いつ制作されたものかについて考えてみると、この火葬の始原の問題との関連で興味深いものがある。年代が明らかな人麻呂関連の歌詠で最も新しいものは、大宝元年（701）の紀伊国行幸の際の歌（巻第三　244番　「柿本朝臣人麿歌集中出」）であり、人麻呂の宮廷歌人としての活躍の時期は、ほぼ持統天皇の称制から崩御までの16年間（686～702年）と見られている。(注5) もし『続日本紀』の記述に従うならば、⑯⑱㉟の一連の歌詠は、道昭を火葬したことから始まった火葬による葬

送習俗を直ちに実行した時期の作品ということになる。火葬により葬られた人は、ここに挙げる歌の場合はいずれも僧籍にある人ではなく、おそらくは俗人である。⑯⑱㉟の作歌年代が特定できないため、これ以上の検討は難しいが、『続日本紀』の火葬の始原に関する記述は、⑯⑱㉟の人麻呂の作品の作歌年代と絡んで、⑭の依網娘子の歌を火葬と見る説も含め極めてデリケートな要素を内包していると言ってよい。

火葬の煙が雲となり、空に棚引く雲に亡き人の面影を探るという考え方は、この後、『源氏物語』の時代にも引き継がれていく。(注6)

荼毘に付された人の魂魄が煙となって空に流れてゆくというのは、それを見ている人にとっては、極めて自然の発想である。そしてそれは、貴人の死に伴う表現として用いられたものであれば、天上他界観につながる観想と一体化しやすいものであると言えよう。

5　黄泉の国にかかわるもの

貴人以外の衆庶の人の魂は、死後黄泉の国へ赴くと考えられていた。『万葉集』において「黄泉の国」について詠まれた作品は、巻第五巻末の山上憶良の歌と巻第九の挽歌の中の次の3例のみである。

㊵905：稚ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ

㊶1804：……遠つ国　黄泉の界に　はふ蔦の各が向き向き　天雲の　別れし行けば　（以下略）

㊷1809：……大夫の　争ふ見れば　生けりとも逢ふべくあれや　ししくしろ　黄泉に待たむと隠沼の　下延へ置きて　うち嘆く　妹が去ぬれば（以下略）

㊵は山上憶良の愛児古日の死を悼んだ長歌の反歌で、黄泉を「下方」と呼んだ例証となる歌である。したがって、黄泉の国は地下にある他界と考えられていたわけである。

㊶は「弟の死去れるを哀しびて作れる歌一首幷せて短歌」という題詞ある田辺福麻呂歌集の歌で、この歌の反歌が㉝である。つまり、どのような様態で葬ったかは明らかではないが、山中への葬送の実修を背景としていることは間違いなく、そうした葬送を受けた弟の霊は、「遠つ国　黄泉の界」に向かったと詠まれているのである。つまり、山に葬られた死者の魂は、黄泉の国に向かうのが既定のこととして詠まれているのである。

㊷は高橋虫麿によって詠まれた伝説にかかわる一連の挽歌の一つで、「菟原処女の墓を見たる歌」という題詞のある作品である。二人の壮士が自分をめぐって争う様子に耐えかねて、菟原処女が死ぬ決意を母に告げる場面の表現である。菟原処女は自分が死ぬことにより二人の男の恋争いを収束させようとしたわけであるが、自分の死後黄泉の国で逢瀬を遂げようと述べている。この例も、死後のこととして、黄泉の国で逢うことを既定のこととして詠まれている。

『万葉集』の例としては、この3例しかないというのは意外な感があるが、通常人が死後赴くべき他界として黄泉の国が想定されており、そこに至る道を黄泉（道・途）ととらえていたことは間違いない。

6　岩窟への葬送

岩窟への葬送については、始原的には、2で考察した山中への葬送と重なる部分があると考えられるが、死者（死に行く人）を岩屋の内部に葬る実修や観想を詠んだ歌が3例ある。

㊸＊199：……　神さぶと　磐隠ります　やすみししわご大君の（以下略）（天武天皇）

㊹418：豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさず（河内王）

㊺419：石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく（同前）

㊸は、高市皇子の殯宮で柿本人麻呂によって作られた歌である。高市皇子の父天武天皇は、この時既に薨去しており、皇后が持統天皇として即位していたのであるが、その皇太子草壁皇子が亡くなり、その後皇太子となった高市皇子も亡くなったその殯宮で

の歌詠である。先に薨去した天武天皇を偲ぶ部分で、「神さぶと　磐隠ります」と詠んでいる。今や神として岩戸の中にお隠れになっているという意味である。㊹㊺は、「河内王を豊前国の鏡山に葬りし時に、手持女王の作れる歌三首」という詞書のある歌である。中西氏が「葬」を「やきはふる」訓んだ根拠は校注では明らかにされていないが、火葬にせよ土葬にせよ、葬送の際の歌詠であり、河内王の遺体（遺骨）は岩窟の中に葬られ、外部から遮断されたわけである。㊸のように、天上界の岩屋の中に先帝の魂が鎮まっているという捉え方と、㊹のような葬送の実修とは密接な関係があると思われる。

7　旅先での死

『万葉集』には、人々の日々の日常の暮らしの中で生まれた感動が、様々な情感で詠じられているが、死にかかわって痛切に悲哀を覚えさせるのが、旅の途上での死、いわゆる客死である。これは詠みぶりによって、幾つかに整理することができる。

〈行路死者〉

いわゆる行き倒れのように、旅の途上等で路傍や海辺などに倒れ、死んだ人についての歌詠で、『万葉集』中に以下に示すように十二首あるが、柿本人麻呂の歌が四首を占める。

㊻＊220：……　波の音の　繁き浜べを　敷栲の　枕になして　荒床に　自伏す君が（以下略）

㊼＊222：沖つ波来よる荒磯を敷栲の枕と枕きて寝せる君かも

㊽＊223：鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ

㊾226：荒磯に寄りくる玉を枕に置きわれここにありと誰か告げなむ

㊿415：家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ

(51)＊426：草枕旅の宿に誰が夫か国忘れたる家待たまくに

(52)1800：……　鳥が鳴く　東の国の　恐きや神の御坂に　和霊の　衣寒らに　……　大夫の行のすすみに　此処に臥せる

(53)3336：鳥が音の　きこゆる海に　……　鯨魚取り　海の浜辺に　うらもなく　宿れる人は　（以下略）

(54)3339：……　恐きや　神の渡の　重波の寄する浜辺に　高山を　隔に置きて　沖つ藻を　枕に纏きて　うらも無く　偃せる君は　（以下略）

(55)3341：家人の待つらむものをつれもなき荒磯を纏きて偃せる君かも

(56)3342：沖つ藻に偃せる君を今日今日と来むと待つらむ妻し悲しも

(57)3343：浦波の来寄する浜につれもなく偃せる君が家路知らずも

歌いぶりは様々であるが、倒れ伏している人への思いとともに、旅の途上で倒れたことも知らずに家で待っているであろう家族のことに思いをいたす歌もあり、ともに哀切な響きである。

旅先での死、いわゆる客死については、当時の交通事情や医療事情等を考慮するならば、相当の頻度に上ったであろうことは、容易に想像される。それゆえに旅に出るに当たり、紐の結び等様々な呪儀めいたことが行われたわけである。しかしながら、そうしたまじないや祈りもむなしく客死する例は少なくなかった。このように、道に行き倒れることもあれば、旅先のどこかで死に至ることもある。

客死の例としては、こうした行路死者を直接詠じたものと、(51)に示した人麻呂の歌のように、倒れ伏している様を〈旅の仮寝〉として表現する一連の挽歌がある。

(58)3688：……　大和をも　遠く離りて　岩が根の荒き島根に　宿りする君

(59)3689：岩田野に宿りする君家人のいづらとわれを問はば如何に言はむ

(60)3690：世間は常かくのみと別れぬる君にやもとな吾が恋ひ行かむ

(61)3691：……雲離れ　遠き国辺の　露霜の　寒

き山辺に　宿りせるらむ

⑫3692：はしけやし妻も子どもも高高に待つらむ君や島隠れぬる

⑬3693：黄葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも

⑭3694：……壱岐の海人の　上手の占を　かた灼きて　行かむとするに　夢の如　道の空路に別れする君

いずれも挽歌の部立の中の歌である。『万葉集』巻第十五は、前半に遣新羅使一行の旅日記のごとき一連の歌が収載されているが、⑧の歌は、命を受けて韓国に渡航する途上、壱岐の島で鬼病に遭って死んだ雪連宅満を悼んだ歌である。⑨と⑩の歌は⑧の歌の反歌である。⑪と⑭の歌は、⑧の歌に続く作品であり、詞書はないが、歌の内容からみておそらく同じ題材を詠んだ歌であろう。⑫、⑬の歌は、⑪の歌の反歌であり、この七首はすべて同じ題材を詠んだものと考えてよい。旅先で病となり客死した人を「荒き島根に宿りする君」「岩田野に宿りする君」「別れぬる君」「寒き山辺に宿りせる」「島隠れぬる」「山に宿りぬる君」「道の空路に別れする君」というように、「死ぬ」という直接的な表現を使わぬことでその死を悲しみ悼んでいる。その敬避的な表現の中心は、旅先での仮の宿りという発想である。そこには、夜が明けて宿りを終えれば旅を続けようという甦りへの願いが込められていると思われるが、その仮寝から目覚めることのない人への悲しみが一連の挽歌のモティーフと言ってよいであろう。

8　その他の用例

これまでにまとめたもの以外に、『万葉集』に見られる死に関する表現を以下に示す。

(1) 海上での死

⑮3335：……鯨魚取り　海道に出でて　畏きや神の渡は　……　直渡りけむ　直渡りけむ

⑯3339：……恐きや　神の渡は　重波の　寄する浜辺に　高山を　隔に置きて　沖つ藻を　枕に纏きて　うらも無く　偃せる君は　……　とゐ波の　恐き海を　直渡りけむ

いずれも巻第十三の「挽歌」としてまとめられた歌群の中の歌である。漁民が出漁して遭難し、葬送する際の歌詠であろう。海上の彼方へ行ってしまったことを、「神の渡は　……　直渡りけむ」とか「恐き海を　直渡りけむ」とか表現している。この⑮と⑯の例を見るかぎりでは、「直渡り」した先にいわゆる海上他界を想定しているようには思えない謳いぶりである。むしろ、「神の渡」を渡ることによりあの世へと行ってしまったと捉えているように思われる。(注7)

(2) 「神葬る」

貴人の死にかかわって、「神葬る」という表現が2例ある。

㊸＊199：……言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬りいませて　麻裳よし　城上の宮を　常宮と　高くしまつりて　神ながら　鎮まりましぬ（以下略）

⑰3324：懸けまくも　あやに恐し　藤原の　都しみみに　人はしも　満ちてあれども　君はしも多く坐せど……麻裳よし　城上の道ゆ　角さはふ石村を見つつ　神葬り　葬り奉れば　（以下略）

㊸の作歌事情については既述した。高市皇子を敬って「神葬り　葬りいませて」と人麻呂は謳ったわけだが、⑰については、誰の葬送であるか明らかではない。巻第十三の「挽歌」の歌群の最初に収載されており、㊸と共通する歌句や発想が少なくないことから、同じく高市皇子の殯宮での歌ではないかという見方もある。

(3) 比喩表現

死を自然現象である「立つ霧」や「置く露」に喩えて表現したものに、次のような例がある。

⑱4214：……立つ霧の　失せゆく如く　置く露の消ぬるが如く……逝く水の　留めかねつと　（以下略）

霧も雲も時の移ろいのなかで儚く消えゆくものであり、人の死もまた流れる水のように留めようとしても留めることはできないというのである。こうした発想と表現は、我が国の古典文学の常套的なものとなってゆく。

9 「死」にかかわる動詞

次に『万葉集』において、直接「死」を表現する動詞にはどのような用例があるかについてまとめる。

(1) 「死ぬ」

「死ぬ」の用例は、次に示す歌番号の歌に含まれている。(下線は挽歌。以下同じ)

67, 86, 349, 460, 504, 552, 560, 581, 598, 599, 603, 603, 605, 683, 684, 738, 739, 748, 749, 889, 889, 897, 897, 1740, 1740, 1785, 2274, 2355, 2370, 2370, 2377, 2390, 2401, 2401, 2434, 2498, 2498, 2544, 2570, 2572, 2592, 2636, 2636, 2700, 2718, 2734, 2764, 2765, 2784, 2789, 2869, 2873, 2883, 2907, 2913, 2920, 2928, 2936, 2939, 2940, 3066, 3075, 3080, 3083, 3105, 3111, 3298, 3344, 3491, 3566, 3578, 3740, 3747, 3748, 3772, 3780, 3780, 3792, 3797, 3811, 3811, 3849, 3852, 3852, 3852, 3885, 3934, 3941, 3963, 4080, 4094

以上、『万葉集』における動詞「死ぬ」の語例は全91例である。「死ぬ」の用例を調べていてすぐに気付くことは、恋愛にかかわる相聞歌の中で、恋情の切なさの喩えとして使用されていることが多いことである。その用例を表現ごとにまとめて示すと、次のとおりである。

〈恋ひて死(なまし・なむ・にする・ぬべく)〉:
67, 560, 598, 599, 603, 603, 738, 739, 748, 749, 2274, 2370, 2370, 2377, 2390, 2401, 2401, 2434, 2498, 2498, 2544, 2570, 2572, 2592, 2636, 2636, 2700, 2718, 2734, 2764, 2765, 2784, 2789, 2869, 2873, 2883, 2907, 2913, 2920, 2928, 2936, 2939, 2940, 3066, 3075, 3080, 3083, 3105, 3111, 3298, 3491, 3566, 3578, 3740, 3747, 3748, 3772, 3780, 3780, 3811, 3811, 3934, 4080
千遍死に返へらまし(603, 2390)
死なまし(ものを):86
死ね(と思ふ):552
逢はず死にせめ:605
思ひ死ぬとも:683
死なむ:684
〈死なずは(仮定)〉:504
〈死なむ(願望)〉:581, 3344
〈死なば・死なば死ぬとも(仮想・反実仮想):889, 889, 3792, 3941
〈死ぬべし(推量)〉:3885, 3963
〈死ぬるもの(運命)〉:349, 460
〈死なな・早も死なぬか(願望)〉:897, 2355
〈死に(死ぬこと)〉:897, 1740, 1785, 3797, 3849, 3852, 3852, 3852
〈死にけり〉:1740
〈死なめ(意志)〉:4094

以上のように、「死ぬ」の語例91例中、相聞(恋)にかかわる歌詠において用いられることが最も多く、68例(74.7%)に及び、「死ぬ」の語例の実に四分の三を占めている。そのうち思いを寄せる相手に恋焦がれて死んでしまいそうだという内容のものが63例で、相聞にかかわる「死ぬ」の用例の93%を占めている。これは直截的な歌いぶりの多い『万葉集』の恋歌の特徴をよく反映しているとも言えるが、文学作品として鑑賞する立場から見ると、どれも同じような歌いぶりで、歌が成立する場としての一回性の文学という観点から考えるとき、あまりにも類型的、紋切り型の表現で、表現としての固有性にいささか疑問を呈せざるを得ない傾向でもある。

いずれにせよ、相聞にかかわらない「死ぬ」の語例は全部で23例である。このうち、意味として、仮定、仮想、願望、推量、意志、運命等、直接の死にか

かわらない用例は、14例である。残る9例について見ると、生に対置する死、つまり一般的な意味での「死ぬこと」を意味する用例が8例あり、実際の「死」についての用例は僅か1例だけである。その例も、水江の浦嶋子の伝説にかかわる1740番の歌であり、「後つひに　壽(いのち)死にける」と、いわば伝説上の死を謳ったもので、現実にいま死んだことを意味するものではない。

また、全91例の中に挽歌は二首あるが、願望（3344番）と運命（460番）の用例であり、目前の死を直接謳ったものではない。

したがって、『万葉集』の歌の世界の中では、現実の死を「死ぬ」として表現した用例は一つもないという極めて奇妙な結果が明らかとなった。

(2)　「過ぐ」

「過ぐ」の用例は、次に示す歌番号の歌に含まれている。

28, 47, 106, 136, 195, 199, 199, 207, 217, 221, 250, 253, 282, 300, 325, 354, 422, 427, 450, 450, 463, 481, 509, 509, 623, 668, 686, 693, 696, 816, 884, 885, 886, 886, 942, 949, 967, 1023, 1066, 1069, 1119, 1156, 1174, 1178, 1180, 1190, 1212, 1230, 1268, 1389, 1410, 1428, 1434, 1489, 1491, 1504, 1554, 1557, 1559, 1591, 1599, 1600, 1601, 1651, 1674, 1684, 1689, 1702, 1703, 1708, 1734, 1737, 1740, 1747, 1748, 1749, 1773, 1774, 1792, 1796, 1797, 1834, 1844, 1855, 1884, 1888, 1973, 1998, 2024, 2133, 2152, 2166, 2209, 2218, 2251, 2269, 2286, 2290, 2297, 2348, 2401, 2455, 2685, 2732, 2785, 2845, 2845, 2870, 2927, 3056, 3153, 3160, 3228, 3230, 3237, 3240, 3307, 3309, 3329, 3333, 3333, 3344, 3352, 3388, 3423, 3493, 3600, 3606, 3606, 3627, 3688, 3779, 3917, 3946, 3957, 3957, 3969, 3991, 3993, 4000, 4003, 4011, 4176, 4177, 4180, 4193, 4194, 4210, 4211, 4349, 4378, 4395, 4398, 4438, 4445, 4463, 4496, 4497

これらの「過ぐ」の用例の中、死を含意する表現の用例を表現ごとにまとめて示すと、次のとおりである。（＊柿本人麻呂　（＊）柿本人麻呂歌集）

- 黄葉(もみちば)の過ぎ（て）：＊47, ＊207, 1796, 3333, 3344
- 過ぎゆく：＊195
- 過ぎむ：＊199
- 過ぎにし（人、妹）：＊217, 427, 463, （＊）1119, （＊）1268, 1410, 1797, 4211
- 山の際に往き過ぎ：481
- 過ぎなむ：884, 886
- 過ぎかてぬ：885
- 過ぎにけむ：2455

以上のとおり、『万葉集』における動詞「過ぐ」の語例は全158例。その大半は、通過を意味する「過ぐ」本来の用法で、恋の消長にかかわる用例も少なくない。その中で、「黄葉の過ぎていにき」などのように、その死を比喩的に表現した用例は、20例（「過ぐ」の語例全体の12.7%）であり、一定の割合は占めている。また、挽歌の中で詠まれたものは、19例であるが、そのうち死を含意する用例は10例である。

(3)　「ゆく」（「逝く」）

「ゆく」（「逝く」）の用例は、次に示す歌番号の歌に含まれている。

17, 20, 20, 43, 58, 64, 69, 79, 79, 85, 85, 90, 90, 92, 93, 106, 106, 111, 119, 155, 158, 161, 172, 179, 180, 193, 196, 196, 196, 207, 207, 207, 207, 212, 220, 220, 220, 232, 234, 240, 246, 252, 253, 263, 263, 273, 276, 280, 281, 284, 291, 293, 298, 322, 327, 332, 335, 353, 354, 365, 366, 382, 390, 391, 405, 420, 423, 443, 445, 450, 466, 468, 481, 485, 486, 493, 502, 509, 510, 511, 532, 534, 534, 536, 543, 543, 545, 549, 552, 553, 566, 571, 571, 571, 596, 625, 625, 626, 626, 628, 665, 686, 699, 710, 723, 728, 736, 768, 777, 778, 795, 800, 800,

804, 804, 806, 867, 870, 870, 874, 875, 886, 888, 890, 898, 918, 932, 935, 936, 942, 948, 948, 948, 953, 964, 967, 969, 970, 971, 971, 974, 974, 995, 1002, 1026, 1031, 1040, 1041, 1041, 1047, 1047, 1047, 1049, 1052, 1054, 1054, 1056, 1065, 1066, 1082, 1100, 1119, 1122, 1127, 1139, 1144, 1147, 1149, 1174, 1175, 1178, 1198, 1208, 1210, 1211, 1214, 1217, 1222, 1226, 1234, 1240, 1242, 1250, 1265, 1268, 1269, 1274, 1280, 1307, 1370, 1372, 1379, 1387, 1406, 1410, 1412, 1422, 1428, 1442, 1443, 1453, 1467, 1497, 1498, 1505, 1515, 1532, 1532, 1544, 1546, 1566, 1567, 1570, 1578, 1587, 1600, 1613, 1672, 1677, 1680, 1682, 1687, 1687, 1718, 1727, 1728, 1738, 1738, 1738, 1740, 1743, 1747, 1748, 1749, 1755, 1756, 1759, 1780, 1784, 1785, 1790, 1792, 1792, 1799, 1800, 1800, 1801, 1801, 1804, 1807, 1807, 1809, 1810, 1817, 1827, 1864, 1865, 1878, 1884, 1886, 1894, 1900, 1923, 1923, 1998, 2014, 2016, 2022, 2032, 2044, 2051, 2062, 2075, 2091, 2101, 2103, 2129, 2130, 2137, 2140, 2162, 2192, 2205, 2209, 2214, 2218, 2236, 2243, 2257, 2320, 2336, 2343, 2348, 2361, 2382, 2386, 2389, 2393, 2395, 2401, 2414, 2430, 2434, 2459, 2493, 2510, 2526, 2536, 2551, 2556, 2579, 2590, 2594, 2636, 2643, 2644, 2646, 2674, 2685, 2698, 2702, 2704, 2708, 2709, 2711, 2713, 2718, 2760, 2790, 2792, 2817, 2827, 2843, 2859, 2860, 2879, 2893, 2906, 2926, 2931, 2941, 2947, 2948, 3006, 3014, 3056, 3090, 3102, 3117, 3129, 3132, 3132, 3136, 3153, 3154, 3161, 3178, 3184, 3199, 3204, 3210, 3213, 3216, 3219, 3223, 3227, 3231, 3236, 3240, 3242, 3250, 3250, 3252, 3257, 3263, 3263, 3276, 3278, 3291, 3302, 3302, 3305, 3309, 3312, 3314, 3314, 3316, 3317, 3318, 3319, 3320, 3321, 3324, 3324, 3333, 3335, 3335, 3335, 3338, 3339, 3339, 3339, 3344, 3344, 3345, 3353, 3362, 3366, 3387, 3396, 3423, 3443, 3447, 3447, 3476, 3476, 3510, 3510, 3519, 3519, 3522, 3530, 3541, 3558, 3567, 3567, 3577, 3579, 3580, 3607, 3612, 3612, 3614, 3625, 3627, 3627, 3627, 3630, 3631, 3636, 3637, 3640, 3644, 3666, 3687, 3690, 3694, 3694, 3696, 3702, 3706, 3710, 3711, 3713, 3720, 3721, 3724, 3728, 3728, 3729, 3729, 3773, 3789, 3791, 3791, 3860, 3863, 3864, 3868, 3886, 3895, 3897, 3913, 3927, 3944, 3951, 3954, 3957, 3957, 3973, 3978, 3981, 3990, 3991, 3991, 3991, 3993, 3993, 3999, 4000, 4002, 4003, 4003, 4006, 4006, 4007, 4008, 4011, 4011, 4020, 4038, 4040, 4041, 4042, 4055, 4060, 4094, 4116, 4116, 4122, 4125, 4131, 4154, 4154, 4156, 4156, 4160, 4177, 4200, 4203, 4206, 4214, 4226, 4238, 4243, 4251, 4251, 4262, 4263, 4264, 4281, 4293, 4294, 4317, 4320, 4325, 4325, 4327, 4331, 4338, 4339, 4341, 4344, 4344, 4349, 4352, 4366, 4372, 4372, 4376, 4376, 4378, 4385, 4404, 4406, 4410, 4412, 4414, 4416, 4417, 4421, 4425, 4433, 4435, 4436, 4436, 4483, 4514

以上、『万葉集』における動詞「ゆく」の語例は全部で411例である。「旅行く」「行き過ぐ」のように、往来、移動や通過等行動にかかわる用法が大半である。用例中、「逝く」という死を含意して表現したと解し得るものは、僅かに次の3例（「ゆく」の語例全体の0.7%）だけである。

㊾445：何時(いつ)しかと待つらむ妹に玉梓(たまずさ)の言(こと)だに告げずゆきし君かも

㊿3789：あしひきの山縵(かづら)の児(こ)今日往くとわれに告げせば還(かへ)り来(こ)ましを

(71)3957：……　佐保の内に　里を行き過ぎ　あしひきの　山の木末(こぬれ)に　白雲に　立ちたなびくと吾(あれ)に告げつる

このうちの⑦⓪の例は、二人の男性の求愛に窮した縵児（かづらこ）が入水した伝説を歌った三首の歌の中に出てくるもので、「今日往くと」という表現は、通常「今日池に往く（入水する）」という解釈であるが、「今日往くと」は「今日逝くと」という解釈も可能で、そうなると、⑥⓽の挽歌の末三字「往公鴨」を、引用したように「ゆきし君かも」と訓む説と合わせて、『万葉集』の中で「逝く」という語例を認めることになる。⑦⓪の歌は挽歌という部立ではないが、挽歌的内容の歌詠である。この2例のように、「行って帰らない」という意味の「ゆく」の用法から、「逝く」という意味が派生してくるわけである。もう一つの⑦①の例は、「長逝せる弟を哀傷（かなし）びたる歌一首幷せて短歌」という題詞のある大伴家持の歌で、挽歌である。「（火葬されて）里を行き過ぎ　あしひきの　山の木末に　白雲に　立ちたなびくと」という歌いぶりから、里を行き過ぎたのは、火葬された後の魂魄ということになる。語義どおり解釈するなら、「行き過ぎ」自体は死を含意しない普通の用例ということになるが、動作の主体が火葬後の魂魄という常ならぬものであり、その表現の中に死が含意されていることはいうまでもない。この⑦①の例も含めて、死を含意するという解釈が可能な用例はこれら3例に過ぎない。そしてこれら3例は、「（去って）行く」と口語訳し得るものである。そこで、古語辞典の中には、「逝く」の意味での用法を上代では認めていないものもある。(注8)

(4)　「消ゆ」

「消ゆ」の用例は、次に示す歌番号の歌に含まれている。

217, 1709, 1782, 1782, 2896, 3038, 3039, 3039, 4214

以上、「消ゆ」は、『万葉集』に9例あるが、意味の内訳は雪が消える2例（1709, 1782）、心1例（1782）、草木に置く露が消える5例（217, 3038, 3039, 3039, 4214）、われ1例（2896）である。露が消えるの用例は、いずれも朝露が夕べには儚く消える様を人の命の儚さに喩えた表現で、217番の歌は人麻呂の挽歌であるが、217番以外の3例は、恋の苦しみについて謳ったものである。2896番の「空に消（け）なまし」の例だけは、死ぬことを比喩的に表現したものと解せられるものである。

「消ゆ」の原義は、そこに存在したものがなくなるということであるから、何かが消えてなくなるという現象の中に、生あるものの死を連想させるのは容易である。既述したように、露の如く儚く消える命という発想は、極めて自然な比喩であり、韻文にせよ散文にせよ、『万葉集』以降常套的な表現となっていく。

(5)　「こもる」

「こもる」の用例は、次に示す歌番号の歌に含まれている。

201, 207, 418, 428, 667, 987, 997, 1129, 1304, 1456, 1479, 1809, 1992, 2199, 2285, 2443, 2495, 2495, 2509, 2566, 2656, 2700, 2708, 2715, 2784, 2794, 2803, 3022, 3266, 3310, 3311, 3312, 3326, 3326, 3547, 3803, 3806, 3969, 3972, 3973, 4067, 4138, 4148, 4239, 4283, 4439

以上、「隠（こも）る」の用例は、『万葉集』に46例あるが、原義である「何かの奥、奥まった所に隠れた状態になる」意で使用されているのが大半で、しかも多くは相聞歌の中での使用である。具体的には、次のような表現となって現れている。

- 隠沼（こもりぬ）：201, 3547,
- 隠る：207, 418, 667, 987, 997, 1129, 1304, 1456, 1479, 1809, 1992, 2199, 2495, 2495, 2700, 2715, 2784, 3022, 3326, 3326, 3803, 3806, 3969, 3972, 3973, 4067, 4138, 4239, 4283, 4439
- 隠口（こもりく）：428, 3310, 3311, 3312
- 隠妻（こもりづま）：2285, 2509, 2566, 2656, 2708, 2803, 3266, 4148
- 隠処（こもりど）：2443
- 隠処（こもりづ）：2794

ただし、この中で次の2例は、作歌事情、歌意及

び当時の葬送習俗を踏まえるならば、「隠る」の語意として死ぬことを含意するものと考えられる。

㊹418：豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさず
㉒3806：事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひわが背

この表現は、『古事記』の「天の岩屋戸を開きて刺許母理坐しき。」（上巻）等の用例と同様、岩窟葬を想定したものである。これら岩窟葬を連想させるもの以外は、『万葉集』の「隠る」の用例に死ぬ意味を伴うものはない。したがって、この語が死を含意するのは、こうした場合に限定されている。(注9)

10　まとめ

本稿では、『万葉集』の挽歌に見られる天上他界観及び山上他界観との関連、火葬、黄泉の国、旅先での死、その他の表現について用例に基づいて考察した。人の死や死後の他界観をどうとらえていたかについては、五・七という歌の韻律の中での表現という条件下であるため、片言隻句の中に、その表現の背景としてある考え方や観想を読み取る必要がある。また、限定された表現によって導かれる解釈にどこまでの蓋然性を認め得るかについては、これまでの諸家諸説を踏まえても確定しかねる用例が少なくない。個々の作品の解釈等についてはほぼ通説に拠ったが、他界観や葬制等が、『万葉集』の挽歌においてどのような表現となって残されたかについては、この稿により一応の整理はできたと考える。

また、『万葉集』において「死」を意味する動詞として「死ぬ」「過ぐ」「逝く」「消ゆ」「こもる」について、その用例に即してまとめた。その検討から明らかとなったことは、最も一般的で直截的な表現である「死ぬ」という言葉が、現前する死に対する表現としての用例が、『万葉集』には1例も無いということである。「死ぬ」は生から死へと移る「息往ぬ」を原義とすると考えられるが、目前の現実として人が生きてはいない状態となっても、それは古代人にとってなお死が確定しているわけではないと考えられていた。(注9) 現前する死を「死ぬ」と表現した歌の例が無いということと、生から死への移行についてのこうした考え方とは、おそらく深いかかわりがあると考えてよい。現前する死に対して「死ぬ」という言葉に替えて、そうした状態を表現する言葉として『万葉集』においては、(1)「過ぐ」の用例の中に「黄葉の過ぎていにき」などのように、死ぬことを比喩的に表現したものが20例、(2)「行く」の用例の中に「逝く」という死を含意すると解釈し得るものが3例、(3)「消ゆ」の用例の中に死を直接含意するものが1例、(4)「こもる」の用例の中では岩窟葬を連想させるものが2例あった。これらが、死を含意する動詞についての表現の実態である。これらの動詞は、原義として「死」を意味する言葉ではない。いわば比喩的に死を含意する表現として用いられたものであり、これらの用例には、死の状態を敬避的に表現する意図が感じられるものが少なくない。そして「行く」が「逝く」と表記されることにより、「死ぬ」の意味を代用する動詞として成立するということも中古には確定的なものとなる。『万葉集』におけるこうした表現の態様は、上代の人々の死に対するとらえ方と心情とをよく反映するものであると考える。

（注1）堀一郎「万葉集にあらはれた葬制と他界観、霊魂観について」（『万葉集大成8民俗篇』平凡社　1953年）、本田義憲「万葉集と死生観・他界観」（『万葉集講座第二巻思想と背景』　有精堂　1973年）、和田萃「万葉挽歌の世界」（『日本の古代別巻日本人とは何か』　中央公論社1997年）ほか。特に堀の論考は、『万葉集』の挽歌を総括したうえで、その中から94首を抽出し、葬制と他界観、霊魂観について分類と考察を加えたものであり、本稿の主旨に最も近い先行研究である。

（注2）例えば青森県では葬式のことを「投げにゆく」と言い、三重県伊賀地方では「ほからかす」と言う等の表現の中に、葬制以前の遺棄による屍体処理の記憶があるように思われる。（土井卓治「葬りの源流」　小学館　日本民俗文

化大系2　『太陽と月』第五章　1983年）

（注3）この部分、解釈に決め手を欠くという事情もあって、『萬葉集注釋』②『万葉集全注』⑥をはじめ、大系本①も全集本③も新大系本⑦も、葬法についての解釈を示していない。新潮古典集成④は、「死んで山に葬られた」と注しているので、火葬とは見ていないようである。中西⑤は、両説を併記している。

（注4）引用する『続日本紀』の訓読は、青木和夫ほか校注（岩波書店　1989年　蓬左文庫本）による。

（注5）渡辺護「柿本人麻呂の生涯」『萬葉集講座第五巻』（有精堂　1973年）　ほか
ちなみに柿本人麻呂の死没年代は、通説では和同2年（709）である。（五味智英『万葉集の作家と作品』　岩波書店　1982年　ほか）

（注6）例えば、『源氏物語』「夕顔巻」の「見し人の煙（けぶり）を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな」などによく表れている。

（注7）海上他界としては、常世の国が代表的である。常世の国については、古来諸家諸説あるが、東方海上の彼方にある不老長生の島という捉え方が一般的なようである。（田中久夫「他界観」小学館　日本民俗文化大系2『太陽と月』第六章　1983年）

（注8）「ゆく」の語義の中に上代の文献を引いて「逝く」の意を認めている辞書は、①『角川古語大辞典』（角川古語大辞典編集委員会　角川書店　1962年）②『古語大辞典』（中田祝夫ほか　小学館　1983年）③『時代別国語大辞典上代編』（澤潟久孝編　三省堂　1967年）の三つで、いずれも『万葉集』の3789番を引用している。④『大言海』（大槻文彦　冨山房　1932年）は伊勢物語を引用している。⑤『岩波古語辞典』（大野晋ほか　岩波書店　1974年～）は初版では「逝く」の意を立てていなかったが、改訂版では平安時代の資料を引いて認めた。⑥『上代語辞典』（丸山林平　明治書院　1967年）は認めていない。

（注9）拙稿「上代文学に表された『死』のとらえ方についての考察」　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要　第45号　2010年

〈参考文献〉

① 五味智英ほか校注『万葉集』（岩波書店　日本古典文学大系　1952年）
② 澤潟久孝『萬葉集注釋』（中央公論社　1957年～1968年）
③ 小島憲之ほか校注『万葉集』（小学館　日本古典文学全集　1971年）
④ 青木生子ほか校注『万葉集』（新潮社　新潮日本古典集成　1976年）
⑤ 中西進校注『万葉集』（講談社　1978年）
⑥ 伊藤博ほか『万葉集全注』（有斐閣　1983年～）
⑦ 佐竹明広ほか校注『万葉集』（岩波書店　新日本古典文学大系　1999年）
⑧ 正宗敦夫編『万葉集總索引』（平凡社　1984年）